

「貨幣の二重の役割」について

—— ジンメル『貨幣の哲学』の根本問題 ——

川 口 慎 二

はじめに

ジンメルの『貨幣の哲学』⁽¹⁾においては、「貨幣」はさまざまな性格や性質を与えられ、貨幣は経済面だけではなく、人間社会全般に広く深く多大な影響をもつものとして記述されている。これらの影響の素因となっている貨幣の性格や性質を知るためには、まず、貨幣そのものについて、それがどのようなものなのかを根本から知る必要がある。これは「貨幣の本質」をたずねることにほかならない。

この貨幣の本質については、これまでとくに経済学の分野において、多種、多様な研究が豊富に存在している。しかし、ジンメルの『貨幣の哲学』での貨幣本質論については、これまで論じられる機会はすくなく、また論じられた場合においても、かならずしも、正鵠をえたものとはいえないというのが実状である。

『貨幣の哲学』における貨幣の本質についての記述としては、広く各章においてその時々の論題に関連して多くのものがみられるところである。そのなかで、第1章第3節の後半部分は、主として貨幣の本質そのものについての記述に当てられている。この部分における貨幣の本質についての記述は、そのおかれた位置からも推測されるように、『貨幣の哲学』全体の行論にとって論理的な前提として、基礎的な重要性をもつものと考えられる。こうした観点から『貨幣の哲学』の解読作業のはじめにあたり、まず、

この部分におけるジンメルの所説を明らかにしておくというのが本稿の趣旨である。なお、『貨幣の哲学』の内容および特色については、周知のところとは言い難いのが現状であるので、まず、これらに関して若干の予備的な説明を加えておく。

I 『貨幣の哲学』の100年

ジンメルの『貨幣の哲学』において、「貨幣」はどのように取り扱われているのか。また、現在の経済学において、基本概念として理論的にも政策的にも重視されねばならない「貨幣」の理解について、さらには、高度に発達した貨幣経済といわれている現代社会そのものの理解について、われわれはなにを『貨幣の哲学』から学び取ることができるのか。これが筆者の『貨幣の哲学』全体についての関心の根拠であり、改めて同書の内容の理解のための解説作業を始めようとする所以でもある。本稿はその試みの一つである。

100年以前に出版された書物について、現在においてもなおこのような関心をもつということは、奇異に思われることであるかも知れない。というのは、こうした古典的な書物については、それが読むに値するものであれば、これまでの長年の研究努力の投入により、訳書だけではなく、すでに多くの研究と評価の集積が存在しており、われわれはそれらを援用することにより、容易に内容の把握と理解が可能であると一般には考えられうるからである。しかし、『貨幣の哲学』については、例外中の例外といえる状況におかれてきたようである。

『貨幣の哲学』については、すでに、利用可能な全訳書⁽²⁾としては日、英、仏その他の各国語のものが存在している。しかし、それらが公刊されたのはいずれも『貨幣の哲学』の出版後約80年、今より2,30年以前のことである。また、1980年代からのいわゆる「ジンメル・ルネサンス」を契機として、ジンメルの著作についての再評価が始まり、他の著作を含めて内外の研究書も多く公刊されており、その間に、『貨幣の哲学』についての研究も飛

躍的に増大したことはたしかである。しかし、『貨幣の哲学』についての全面的な研究は近年においてようやく始められたというのが実情である。結果は最近まで、われわれは簡単に同書の内容を把握しうるにたる便利な手立てをもちえないままであったというのが実状のようである。⁽³⁾

また『貨幣の哲学』は、ジンメル自身の学界における処遇の低さと同じく、同書そのものが長年にわたり、相対的に低い評価と関心のままにおかれてきたことはよく知られており、その理由としては、これまでに多くのことが伝えられているところである。われわれはそのなかに、マルクス主義者による同書の否定と排除、ナチス国家社会主義者による自由主義思想の弾圧といった思想的原因にもとづくものをはじめ、様々な複合要因の存在を知ることができる。これらと並んでとくに重要な理由と思われるのは、同書のドイツ語による文書構成の複雑さと内容の難解さが、研究者の同書への接近をきびしく拒んできたという事情があるようである。

とくに、経済学関係者にあっては、同書の「序文」における「これらの研究の一行たりとも、国民経済学的には意図されていない」(11/8)という強い否定的な記述から、同書は経済学とは関係のない存在とみなされ、また近年、主流を占めてきた近代経済学の分野からみれば、『貨幣の哲学』の存在は、研究の方法と目的をまったく異にするものとして無視され、わざわざ時間と労力をかけてまで研究する余地もないものと考えられてきたようである。さらにせまく「貨幣論」の分野にかぎれば、『貨幣の哲学』の存在を無視したことにより現在の学問水準になんらの影響もなかったという見解までが表明されたりしているのが現状なのである。

この経済学の分野での傾向とは異なり、社会学の分野では、『貨幣の哲学』については、翻訳をはじめかなりの研究成果の集積がみられる。しかし、当然そこでは『貨幣の哲学』は社会学の文献であるという理解のもとで、主として同書の社会的解釈と理解が展開されている。このような傾向は一部の例外をのぞき内外の学界に共通にみられる傾向でもある。そこでは「貨幣」そのものについての理解はさておき、「貨幣」は与件として前提さ

れ、ジンメルが『貨幣の哲学』の後半で展開している現代の人間の生活の内容や様式において、貨幣がおよぼす作用についての社会学的分析に主要な関心がおかれてきたと考えられる。

こうした『貨幣の哲学』をめぐる一般の評価の流れのなかで、あえていま、「貨幣」を切り口として『貨幣の哲学』の解説を始めるというのは、『貨幣の哲学』についての私的な思い入れは別として、『貨幣の哲学』に展開されている学際的な思考方法について筆者がいだいてきた共感と期待にもとづくものである。まず、『貨幣の哲学』にみられる研究方法について、照応の便宜のために簡単に素描しておくことから始める。

II 『貨幣の哲学』における研究方法

ジンメルは『貨幣の哲学』の「序文」において、まず、科学と哲学との関係および哲学が科学にもつ役割を明らかにしたのち、哲学の位置決定として、科学の下方、此岸にある哲学、認識論と上方、彼岸にある哲学、形而上学の役割を説明している。この区分に照応して、『貨幣の哲学』は「分析篇」と「綜合篇」の二部に分かれている。

経済学が伝統的にその研究対象としてきた「貨幣」を「哲学」の対象とする場合、ジンメルによって意図されているのは、一つには「貨幣存在の前提条件」として、「貨幣の本質」と「貨幣存在の意義」を人間存在の根本から問うことであり、他は「貨幣の存在と機能」が、人間生活や文化の在り方に与える作用を知ることである。前者は「分析篇」、後者は「綜合篇」の内容となっている。

このような意図のもとでジンメルが本書で究極的な目的としているのは、「経済生活の精神的基礎と精神的意義」を知ることであり、これはまた絶対主義的な史的唯物論に修正を求めることを意味している。また、ここでジンメルが広く依拠している「哲学的立場」は「相対主義的哲学」である。

こうした哲学的立場からのジンメルの「研究方法」は、個別的な実証的知識の集積という過程をへて、最終的な全体的認識に達するという「科学

一般の方法」とは当然に異なっているものである。ジンメルによれば、実証的知識の断片は、全体を部分的に構成、実現するものとして重要である。しかし、「生のすべての個別性は、それぞれに意味の全体性を身につけ、また、全体性によって支えられている」のであって、「研究方法」としては、「個別性についてその意味の全体性を発見する」という方法が可能であり、ジンメルはこの哲学的方法を採用、実践することを出発点としている。なお、ここで「意味の全体性」といわれているのは、ジンメルの場合は「相対性の妥当性」であると理解される。

ジンメルは経済的な現象についても、この方法により、その外面的なものから、経済生活、さらにひろく、社会生活の基礎にある「人間的なもの」の究極的な価値と意義を理解することを試みている。この場合、そのための「手段、素材、例証」として援用されているのが「貨幣」なのである。

このような研究方法の指摘ともに、「序文」にはさらに既述のように「これらの研究の一行たりとも、国民経済学的に意図されてはいない」というきわめて刺激的な主張が表明されている。しかし、これは『貨幣の哲学』の内容が経済学とまったく関係のないものであるということを主張しているのではない。それはまず社会科学の研究には、「学際的接近方法」が重要であることを意味するものである。この点は『貨幣の哲学』において、経済学をはじめ、哲学、社会学、心理学、美学、歴史学その他の学問分野からの援用による、内容豊かな記述がなされていることで、ジンメル自身により実践、裏書きされているところである。

この「学際的研究方法」は、フリスビー⁽⁴⁾により、『貨幣の哲学』の経済学的基礎を検討する際に直面するむつかしい問題の一つとして、一番に指摘されているところでもある。けれども、この点は、『貨幣の哲学』の初版の公刊直後に書かれたシュモラーによる長文の書評⁽⁵⁾において、すでに、『貨幣の哲学』の理解のための要件の一つとして指摘されているところである。

学際的究方法の結果として、『貨幣の哲学』には全体を通じて各分野の専門用語がその時々豊富に援用されており、それらの理解のためには自ら

がその時々にもつ専門用語の知識の程度をはるかに越える理解が必要となることは必然である。したがって、『貨幣の哲学』全体の理解にとっては、自己の専門分野以外の知識の習得が不可欠となる。たとえば、論理の展開において多用されている「相互作用」や「形式と内容」また「相対主義」その他の重要な用語についての正確な理解は、まず最初に取り組んでおくべき基本的な作業となる。しかし、これらの用語とともに、最大の注意をもって臨まねばならないのは、「貨幣」の用語についての理解である。

III 切り口としての「貨幣の本質」

こうしたジンメル研究方法および目的からすれば、『貨幣の哲学』の重点は、後半の「総合篇」にあると考えられる。事実、『貨幣の哲学』についてのこれまでの内外での研究や解説においては、「分析篇」でなく、「総合篇」に重点がおかれてきたというのが実状である。この「総合篇」における、人間生活や文化の在り方にたいする貨幣のもつ積極的な作用と役割の解明という問題は、マルクスの分析をのぞいて、ジンメルによってはじめて正面から研究対象として取り上げられたものである。しかし、その後の経済学や社会学においては、この問題は最近まで『貨幣の哲学』の存在とともに、長年にわたり、等閑に付されてきたものでもある。

前半の「分析篇」は「総合篇」において積極的な作用と役割を与えられている「貨幣」そのものを対象とするものである。ジンメルは既述のように「国民経済学的意図」をもたないことを強調しているが、「分析篇」での貨幣についての理論的および歴史的な記述は、当時における利用可能な経済学的な分析の結果を豊富に援用していると思われるところが多くみられる。けれども、そこでの貨幣についての記述は、経済学での既成の概念をそのまま援用するという安易な手法を適用するものではない。そこでは経済学では説明の埒外とされている貨幣存在の基礎といった問題について、哲学、心理学、社会学での成果を多彩に援用した広くかつ深い分析が、自らの哲学的理論を基礎としてなされているということが特筆されねばなら

い。この点は、現在の経済学での認識方法にとって、一概には無視できない側面をもつと考えられる。

「分析篇」の課題は、既述のように、「貨幣の本質」と「貨幣の存在の意義」を説明することにある。これらの説明は、論理的には「総合篇」における貨幣の積極作用についての理解の前提ともなるものである。したがって、それらは研究対象の重点を「総合篇」におく場合においても、省略可能なものではないことは明白である。また、『貨幣の哲学』が経済学分野における貨幣そのものの理解の深化と拡大のためにも、寄与しうるものがあるのではないかという期待のもとで、解説を企図する場合には、まず、「分析篇」の内容を十分に理解しておくことが当然に必要である。

しかし、難解の代名詞的存在といわれている『貨幣の哲学』は、「分析篇」も「総合篇」も一般の研究書のように簡単には通読の可能なものではない。そこにおける記述の理解、解説は決して容易な作業ではない。また、この大部の書物のこれまでの「読まれかた」はきわめて多岐にわたり、多様な理解が可能であるといわれており、論者の選択しうる解説の視点ないし切り口もまた多数に存在することになる。さらに、文章構成と内容の複雑さのため、選択した一つの視点に依拠した解説もまた簡潔な形で纏めることもむつかしいという結果に直面する可能性が大きいと思われる。

『貨幣の哲学』においては、両篇ともに「貨幣」が重要な概念として存在していることは当然であり、ジンメルが貨幣をどのように取り扱っているかという間にたいする答えとしては、『貨幣の哲学』の全体の広範囲にわたって多様な答えがみだされることになる。当然に『貨幣の哲学』の目次にあたる「内容一覧」(3-8/2-6)に示されている「貨幣」に関連する用語も多く存在する。そこには、貨幣の本質、機能、意義、役割、職能、性格や性質といった基本的な問題をはじめ、さらに、貨幣実体、貨幣価値、貨幣所有、貨幣流通、貨幣経済、労働貨幣、その他、通常の経済学関係書にみられると同じような用語が多数存在している。これらの、用語を含めて、全体の体系的な論理的解釈と理解をうるということが、『貨幣の

哲学』の解説の重要な目的でもある。しかし、これらの作業は、すべてを一括して実行するには、その範囲が広汎に過ぎることもまた明らかである。

このような観点から本稿においては、『貨幣の哲学』の本格的な解説の出発点として、まずもっとも基本的な問題であると考えられる「貨幣の本質」の問題を選び、ジンメルによって貨幣の本質についての認識がどのように形成されているかを切り口として作業を始めることとする。この貨幣の本質およびこれに関連した貨幣の性格や性質についての記述は、『貨幣の哲学』の各章において随所に繰り返えされ、その時々いろいろな文脈と論証のなかで展開されているものである。したがって、最終的にはそれらのすべての記述を集めた内容ゆたかな論述が再構成されるべきであるが、この作業のためには別にかかなりの大部の論稿の準備を必要とする。本稿ではその第一歩として、もっとも基本的な事項がふくまれている第1章の記述を中心に解説を進めることしたい。

IV 貨幣本質論の位置

第1章の「価値と貨幣」は『貨幣の哲学』各章の最後に書かれたものといわれており、第2版において大幅な改訂がなされているところでもある。また、本章は他の章と同じく三つの節から構成されているが、他の章と同じくいずれも内容を示す「題目」がない。それぞれの「節」に「目次」に相当すると思われるものが、「内容一覧」として頁数をつけずに一括して記載されている。内容理解のためには、まず各節について読者のほうで適当な題目を考案するとともに「内容一覧」の各項目にそれぞれの頁数を割り当てる必要がある。

まず、第1節には「価値の本質と形成」、第2節には「経済的価値の形成とその源泉としての交換」という題目をつけることが可能である。けれども、第3節は、記述内容が「相対主義原理」と「貨幣の概念」という異なる二つの部分に分かれているので、この点をそのまま踏襲して、「相対主義と貨幣の概念」という題目をつけることが考えられる。しかし、内容のよ

り適格な表示としては、第4節の存在を新たに「観念的」に構想し、第3節「相対主義」、第4節「貨幣の概念」として再構成しておくことが理解しやすいかもしれない。さらに、各節を構成している「内容一覧」についても、文章構造の理解を容易にするためには、既存の「内容一覧」とは別に平行して、内容にふさわしいと思われる表現のもとでの再構成を模索しておくことも必要であると考えられる。

なお、本稿の主題とする「貨幣の概念」の記述にいたるまでに、『貨幣の哲学』の記述内容にはかなりの頁数が存在している。第1章の第1節で、価値論から出発、価値一般の本質とその形成の問題を明らかにしたのち、第2節において経済的価値の形成のための不可欠な条件としての交換の問題に移り、さらに、第3節においては、「貨幣の概念」の検討に入る前に、前半において、相対主義哲学についての長文の記述が挿入され、その後、ようやく後半から「貨幣の概念」についての説明が始まるという構成となっている。以下、本稿においては、さきに選択した切り口にもとづき、第3節後半の「貨幣の概念」を中心にその内容の検討をおこなうことになる。しかし、そこにいたるまでの「価値論」および「交換と経済的価値」さらに「相対主義哲学の理念」等についての記述は、『貨幣の哲学』の論理の基礎的な部分にあたるものであり、同書の本格的な理解のためには、いずれも別個にそれぞれに独立した問題として十分に検討されなければならないものであることは当然である。

本稿で対象とする第1章第3節後半の「貨幣の概念」についての記述内容(121-138/95-109)は、「内容一覧」によれば、つぎの三つ項目から構成されている。

- 1 欲求された客体を経済的とする交換関係および事物の代替可能性の独立した表現としての貨幣(121-128/95-102)
- 2 貨幣の価値安定性、貨幣の発展および貨幣の客観性からの貨幣の本質の解明(128-136/102-107)

3 諸事物は相互に他との相関関係においてそれらの意義を見出すという普遍的な存在形式の実体化としての貨幣 (136-138/107-109)

これらの3項目のうち第1項目において、貨幣の本質についての直接的かつ多角的な記述が含まれ、「純粹概念としての貨幣」と「貨幣の二重の役割」についての記述がみられる。第2項目では、「貨幣の二重の役割」によって自ら価値をえた貨幣が「経済活動の連続性」の保証を支える要因であること、さらに、そのための条件としての「貨幣価値安定」の必要であることが論じられている。また、こうした貨幣のもつ純粹な意味が貨幣経済の発展とともに明確化され、貨幣の分割可能性により価値の公分母化へ発展することが示され、最後に客体の価値の客観化と交換可能性との関係についての再確認が試みられている。これら両項目での記述をうけて、第3項目においては、改めて「貨幣の哲学的意義」を規定し、ジンメルが本書で最終的に企図している貨幣の存在と相対主義的哲学との適合可能性が結論されている。

これらの文脈におけるジンメルの貨幣の本質についての記述について、まず留意すべきことは、第1章は最後に書かれたものであるという事情である。そこでの重点的な課題は、ジンメルが最後まで苦しんだといわれた価値論を確立することおよび交換と経済的価値の形成、さらに、方法論としての相対主義的哲学を説明することにあつたと考えられる。貨幣の本質や機能、性格や性質については、すでに第2章以下において豊富な記述がなされており、これらを前提としての第1章の記述であるという事情を勘案すれば、第1章での貨幣についての記述は、内容的にも紙幅の面からもおのずから限定されて、より基本的かつ一般的なものにならざるをえなかったものと思われる。このような限定された内容として貨幣の本質に関連してジンメルが記述しているのが主としてこの「貨幣の二重の役割」についてのものであると考えられる。この部分の記述もまた他の部分と同じく複雑な文脈のなかで、哲学的、理念的な用語と表現を駆使して簡略した形

で展開されているものである。

V 二つの貨幣概念

ジンメルは第1項目の初めにおいて、貨幣の本質を明らかにするために、まず、「貨幣」とその実体的な担い手である「素材」とを概念的に区別し、実体を捨象して「貨幣の純粋な本質」を問題とすることが必要であり、この区別のないことが「無限の誤謬」の原因であると主張している。この「素材」の問題は、第2章において改めて取り上げられており、ここでは一般に貨幣の「象徴化」あるいは経済学において「無体化」といわれてきた問題をめぐって詳細な記述がみられるところである。

このようにジンメルは実体を概念的に捨象した「純粋な貨幣」について、「具体的な価値の系列の外部と内部」という異なる二つ観点からの二つの概念の区別を論じている。⁽⁶⁾一つは経済系列の外部の観点からの哲学的、理念的な概念であり、他は経済系列の内部の観点からの現実的、実践的な概念である。前者では、観念的に「貨幣の純粋概念」として貨幣の理念が示めされており、後者では、「貨幣の二重の役割」の名のもとで価値として貨幣が現実的にもつ役割が論じられている。⁽⁷⁾

前者の「純粋概念としての貨幣」のもとでジンメルがいろいろな用語と文脈のもとで述べている内容を、経済学における「貨幣の本質」についての見解と比較するならば、それは結局のところ、経済学における古典派の「貨幣ベール観」ないし「二分法」にみられる貨幣の中立性のもとでの静態的な貨幣本質観と同列にあるものと考えられる。それはジンメルの当時の経済学についての豊かな知見を下敷きにしたものであり、同時にジンメルの哲学的立場である相対主義的理念に合致する貨幣観として援用されているものでもある。

この「純粋概念」としての貨幣本質観では、商品と商品との相対価値はすでに商品間で決定されており、貨幣はこの相対価値を反映して相対的な貨幣価格で表象するという役割をもつという意味で関係にすぎない。そこ

では貨幣は自らは価値をもたない。これはジンメルにより貨幣は「関係である」と規定されているものでもある。

これに対して後者の「二重の役割」では、商品が貨幣によって売買される系列の内部において、貨幣はみずから価値をもち商品間との交換において、「絶対価格」であり、絶対的な基準として経済過程のなかで位置を占める。これはジンメルにより貨幣は「関係をもつ」と規定されているものである。

前者の場合、貨幣は相対的な交換価値の純粋な象徴として、相対主義の価値形式を体現化しているものである。後者の場合、貨幣は「通用するもの」そのものであり、貨幣は交換価値のたんなる象徴ではなく、それ以上に貨幣は事物を測定した貨幣自体が他の価値にとって測定されるという現実的な認識にもとづくものである。

こうした貨幣についての二つの認識のうち、貨幣は「関係である」という「純粋概念」の認識のみからでは、『貨幣の哲学』の後半において示されている「貨幣の積極的作用」を直接に論証できないのではないかという直感的懸念からしても、ジンメルが貨幣は「関係をもつ」という認識を示していることは、『貨幣の哲学』の後半の記述にとってもきわめて重要なものであるということが出来る。しかし、この「貨幣の二重の役割」の語は、「内容一覧」の項目としても存在せず、さらにそこでは、関係する記述が前記の第1項目と第2項目のなかに埋没、混在しているというきわめて複雑な文章構造となっている。そのためにか、それはこれまで貨幣本質観の論議においてジンメルメの名を援用してきた多くの論者によっても、看過されてきたものでもある。

VI ジンメルの記述内容

つぎに、理解の便宜のために、二つの貨幣概念のそれぞれについて、ジンメル自身の言葉で述べられているところを直接に援用しておく。ジンメルの記述内容については、概要を要約するよりも、各所に分散されている

記述そのものを複雑な文脈のなかから抽出し、一括して表示することが理解に必要かつ便利な方法であると考えられるからである。

1 経済系列外での貨幣 —貨幣は関係である—

「事物の価値は、事物の経済的な相互作用として理解され、貨幣においてそのもっとも純粋な表現と頂点とをみいだす。」121/95

「目にみえる対象としては、貨幣は価値ある諸対象そのものから抽象された経済的価値が身にまとう身体である。」122/96

「貨幣は交換可能性の純粋な形式にはかならない。それは事物における要素あるいは機能を体現化する。この機能によって事物は経済的となる。この機能はたしかに事物の全体性を形成してはいないが、しかし、おそらく貨幣の全体性を形成しているのである。」138/109

「ある商品の貨幣価格は交換可能性の尺度を意味し、この尺度はこの商品と他の商品の総体とのあいだに存在する。貨幣をその具体的な表現のすべての結果から独立したあの純粋な意味に解すると、貨幣価格の変化は個々の商品と他の商品の総体とのあいだの交換関係が変化するということをあらわしている。」123/96

「抽象的な資産価値としての貨幣は、価値を構成する事物の相対性以外の何ものも表現しない。しかも、貨幣は同時に静止した極として、これら事物の永遠の運動と動揺と均衡とに対立している。」124/98

2 経済系列内での貨幣 —貨幣は関係をもつ—

「この貨幣の二重の役割とは、貨幣が一方では交換される商品相互の価値関係を測定しながら、しかも他方では自らそれとの交換に入り込み、

こうして自ら測定されるべき大きさを表現するということである。さらに、貨幣は自己を測定するにもまた一方ではその対価を形成する財によってであり、他方では貨幣そのものによってであるということである。」126/99

「貨幣は、“通用するもの” そのものである。そして経済的に通用するという意味は、あるものに通用すること、なにか他のものと交換できることである。他のすべての事物は一定の内容をもち、それゆえに通用する。貨幣が内容をもつのは逆にそれが通用することによってである。」124/97

「貨幣が静止した極としてこのように対立しないかぎり、貨幣はまさにもはや純粋な概念によっては作用しない。貨幣は他のすべての個別客体と対等である個別客体として作用する。」125/98

「貨幣が直接に価値ある事物の相互のあいだの価値関係を表現するということは、貨幣をこの関係から開放し、貨幣を別の秩序に入れる。貨幣は問題の関係をその実際の結果とともに体现することによって、みずから一つの価値を受け取る。その価値によって貨幣はすべての可能な具体的な価値関係との交換関係に入るだけでなく、その価値によって貨幣は具体性の彼方にあるあの貨幣自身の秩序の内部においても、また、貨幣諸量間の関係を表示できる。」125/98

「貨幣が財相互の関係を表現し、財が測定され交換されるのを助けるかぎり、貨幣はまったく異なつた起源の力として、価値尺度としてであれまた交換手段としてであれ、直接に有用な財の世界に進み出る。けれども、貨幣が他のすべての財の外にたつ自らの地位にもとづき、これらの職能をはたすことができるためには、貨幣ははじめにはそれ自身が具体的なあるいは特別な価値であり、そしてこの職能を果たすことによって、

最後にはまたそのような価値となる。」125/98-99

VII 相対主義原理との関係

このような二つの観点からの貨幣についてのさまざまな記述について、まず思い出されるには、第3節の冒頭で、ジンメルが自らの相対主義的哲学と貨幣との関連について記しているつぎのような主張である。

「経済的価値のこの概念から、その頂点でありそのもっとも純粋な表現としての貨幣の概念を展開するまえに、経済的価値の概念そのものを原理的に規定された世界像のなかに受け入れ、それを手がかりに、貨幣の哲学的意義を推定することが必要である。というのは、経済的価値の定式が世界の定式と平行して進行する場合にはじめて、経済的価値の最高の実現段階である貨幣は、その直接的な現象を越えて、あるいはより正しくは現象そのものにおいて、現存在一般の解明に寄与することを要求できるからである。」93/71

この主張は、ジンメルが「序文」でも明らかにしているように、貨幣を手段として人間存在の世界を理念として組み立てることを目的としており、貨幣の表現する経済的価値の定式と存在の世界の定式との両者が、矛盾、対立することなく、「相対性概念」により照応関係にあることにより、はじめて貨幣がこの目的に適したものと了解されることが必要であるという考えを意味している。

ジンメルはこの必要を指摘したのち、既述のように長文の「相対性概念」による認識原理を説明し、最後にこれらの説明が必要な哲学的立場の指示およびそれへの経済的価値の組み入れを可能にするために十分なものであることを主張、結論としてつぎのように述べている。

「以上のことは、考察の究極的な統一性を事物の多様性が取得するのを

可能にする哲学的立場を十分に指示するものである。これによって、すでに与えられている経済的価値の意味もより広い関連のうちに組み込まれる。認識できるすべての存在の根本的特徴、すなわち、現存するすべての存在の相互依存と相互作用とが経済的価値を受け入れ、その質料にこの「生」の原理を授けるということにより、ここにはじめて貨幣の内的本質が理解されうるものとなる。というのも、経済的な相互作用として理解されている事物の価値は、そのもっとも純粋な表現と頂点とを貨幣においてみいだしたからである。」121/95

ここでジンメルによって推定されている「貨幣の哲学的意義」は、本稿でこれまで対象としてきた第1章第3節の第3項目において、段落を改めて独立してつぎのように記せられている。

「事物はその意味を相互にみいだすものであり、事物が浮動している相互関係こそ事物の特定の存在を形成するという存在一般の方式を、実際の世界の内部において、もっとも決定的に目にみえる形で示し、もっとも明瞭に実在化したものが、貨幣である。これが貨幣の哲学的意義である。」136/107

この記述の前半は、存在一般についての「相対主義的世界観」の表明であり、後半は「貨幣」がこの世界観を決定的にかつ可視的に現実化しているという認識に「貨幣の哲学的意義」があるという推定結果を示しているものである。また、これは貨幣は「生」の個性をもつ外面的な存在であり、そのなかに「意味の全体性」である相対性の妥当性を発見するというジンメルの哲学的方法の具体的表明でもある。

この哲学的意義によって、「貨幣」は事物の相互関係から形成される「経済的価値」の「純粋な表現」であることに加えて、「相対主義的世界形式の象徴的存在としての貨幣」ないしは「普遍的な存在形式の実体化としての

貨幣」として、より一般的、理念的に意義づけられうると解されている。

上記の「系列外における貨幣」についてのジンメル記述からすれば、「純粹概念としての貨幣」がこの哲学的条件に合致していることは容易に理解されるところである。しかし、「系列内における貨幣」についての記述からすれば、貨幣はもはや純粹な概念のみによっては作用せず、自から価値をもち「それ自らは相対性をまぬがれている」存在として規定されており、ジンメルという哲学的条件には合致していないのではないかという疑問が生じる。この点は、ジンメルが「観念的な世界」から「現実的な世界」に移り、そこでは当初の一義的な哲学的理念の妥当性を貫くことができず、貨幣それ自体の相対主義的規定に失敗していると一部でいわれているところでもある。したがって、この「二重の役割」の相対主義的解釈の可否の問題は、『貨幣の哲学』全体の解釈の点からも、改めて検討されるべき問題であるといえることができる。

VIII 「二重の役割」の意義

けれども、既述のように他方において、相対主義的哲学に適合した観念的な「純粹概念としての貨幣」をもってしては、貨幣は現実の貨幣経済における過程を規定できず、結果として、『貨幣の哲学』の後半における貨幣の積極的な役割の担い手としての場を占めることもできないのではないかという懸念も否定できない。こうした懸念の解決のために、哲学的な一義的妥当性の問題を離れて、ジンメルが「貨幣の二重の役割」の問題を提起したことは、『貨幣の哲学』そのものの論理的構成という点からも必要かつ重要な措置であったといえるのではないだろうか。

ジンメルはこのような意義をもつ「貨幣の二重の役割」を認識の基礎に、「関係をもち」、「それ自体は相対性をまぬがれた」絶対的存在としての貨幣を主語として、『貨幣の哲学』の各章において、貨幣が織りなす様々な作用と性質についての分析と記述を学際的にかつ精力的に展開していると解釈できる。この積極的な作用は貨幣のもつ各種機能にもとづいて生じる

ものであり、貨幣はこれらの機能を果たし、作用をもつために様々な性質と性格をもつ存在であることは、第2章以下においてジンメルにより詳細に記述されているところである。このことが可能となるための論理的基礎は「貨幣の二重の役割」の存在にあるということがここでの一つの重要な結論である。⁽⁷⁾

さらにまた、当時の経済学の分野で支配的であった、古典学派の静態的な貨幣本質論を「貨幣の純粹概念」として哲学的に吸収しながら、これとは別に「貨幣の積極的作用」の基礎として「貨幣の二重の役割」により動学的な貨幣本質論を提起していることの意義は、「学説史的研究」という視点からも特記すべきことであると考えられる。しかし、『貨幣の哲学』については、この学説史的研究の推進は容易ではないという事情がある。理由は『貨幣の哲学』には当時において利用可能であったと思われる関係文献についての引用記載がほとんど存在しないからである。学説史的研究を試みるのであれば、当時に存在していた不特定多数の数々の文献についての探索が不可欠である。しかし、これは決して容易な作業ではない。また、たまたま部分的にジンメルの記述に対応するものが発見されたとしても、それを以て『貨幣の哲学』についての評価を左右しうるものでもないことは明らかである。

なお、貨幣の本質、さらに、それから演繹される貨幣の性格や性質、また、貨幣の作用についての関連した記述は、『貨幣の哲学』の第2章以下各章においてさまざまな文脈のなかで内容ゆたかに展開されているため、これらを簡単に一纏めに祖述しうるものではない。これらについての解釈と理解を整合性のある形で順次に文章化していくことが今後の課題となる。第1章のこの段階でも、すでにジンメルが言及しているものとして、貨幣の内的性質としての貨幣の無性質性、非個性性、代替可能性等の諸概念と貨幣が経済の連続性および貨幣価値の不変性に関してのもつ意義についての記述がある。しかし、これら概念や意義についての記述は、ジンメルが第2章以下で言及している関連事項についての記述に加えることにより、よ

り適確に理解されうるものと考えられる。ここでは、これらを含めて『貨幣の哲学』全体の理解について、基本的でありかつ一般的であると思われる「純粋な概念」そのものおよび「概念の純粋化への発展傾向」についてのジンメルの認識について記しておくこととする。

IX 純粋概念とその正当性

「純粋」という用語は、「相対性」とともに『貨幣の哲学』において重要な意味を付与されたものとしてジンメルが好んで使用している哲学的用語の一つである。つぎに、ジンメルが第1章において記述しているところを前後の文脈とともに援用しておく。

「ある現象系列の純粋な概念はしばしば理想である。これはその現象系列そのもののなかにはけって余すところなく実現されてはいない。しかしそれにもかかわらず、それは現象系列がこの理想を目指して努力していることをつうじて、その現象系列の意味と内容とを有効に解明するものである。」138/109

「われわれは現象の本質を概念によって定義するが、この概念をわれわれはしばしばまったく現象そのものからでなく、ただより発展したそしてより純粋な現象からのみうるができる。」137/109

「客体の経済的な相対性をみずからのなかに表現するという貨幣の意義は、完成した現実としてそこにあるのではなく、すべての歴史的な象象とおなじように、貨幣の現象もまたようやく徐々に概念の純粋性へと純化する。それをわれわれは理念の王国における貨幣の使命と位置と考える。」133/105

「貨幣の歴史的な起源がどのようなものであったにせよ、とにかく初め

から確かであったのは、貨幣はその純粋な概念を表現する完成した要素として突然に経済のなかに現れたのではなく、ただ既存の価値物からのみ発展することができたにすぎないということである。」121/95

「その交換可能性によって事物に生じる価値，あるいは，価値を経済的価値とするこの価値の変形は，なるほど経済の外延的および内延的な上昇にともなって，ますます純粋に強力に事物において現れるが，—この事実をマルクスは，商品を生産する社会における交換価値のための使用価値の駆逐と表現した—しかし，この発展はけっしてその完成には到達できないように思われる。」138/109

なお，同様の記述が第2章にもある。これは「純粋概念の正当性」についてのジンメルの強い知見を示すものである。つぎに援用しておく。

「事物の相互に測定される価値を表現するだけで，どのような実質価値とも無縁な表現としての貨幣の純粋な概念は，—たとえ歴史的な現実は，つねにたんなる貨幣の実質価値という反対の概念によって，この純粋な概念の縮小として現れるとしても，—完全に正当化され続ける。われわれの知性はただ实在の程度をあくまでも純粋な概念の限定としてのみ把握し，理解することができる。そしてこの純粋な概念は，たとえ現実からいかに隔たっているにせよ，それが現実の解明に果たす職能によって正当化されるのである。」198/157

お わ り に

貨幣の本質の問題は，今日の経済学においてもまず最初に検討されるべき基本的な問題の一つである。そしてそこでの支配的な見解は，本質を貨幣の実体ではなく機能に求める「機能説」であり，さらに，「本質的な機能」が一般的交換手段にあるとするものである。そこでは価値尺度機能は通常

は交換手段機能に論理的に含まれるものであり、価値の貯蔵機能や移転機能は交換手段機能からの派生機能とみなされている。こうした本質観はジンメルが『貨幣の哲学』において記述しているつぎのような見解と軌を一にするものである。

「貨幣はそれがもつ価値を交換手段として獲得した。交換すべきなものがないところでは、貨幣はまったくいかなる価値をももたない。なぜならば、貯蔵手段と移送手段としての貨幣の意義は、明らかに、交換手段と同列にあるのではなく、むしろ交換機能からの派生したものであるからである。交換機能がなければ、貨幣は他のこれらの機能を決して果たすことができないであろう。これに対して交換機能そのものは、これらの機能から独立しているのである。」179/142

さらに、経済学で貨幣流通の根拠としていわれている「一般的受領の信頼」の概念は、ジンメルにおいてはよりひろく「貨幣に投入された観念」の一つとして理解されうるところである。しかし、経済学では貨幣存在の基礎や貨幣の本質、また貨幣の機能や意義について、さらに検討を深めていくということはない。それらは科学の果たすべき役割の埒外にある問題とされているのが通常である。ジンメルの『貨幣の哲学』はさらに一步を進めこの埒外とされた問題を一つの重要な課題とするものである。しかもそれは、経済社会内での貨幣自体の機能や作用のみを学際的に解明することを課題とするものではない。貨幣を材料として、貨幣が経済活動におよぼす作用を越えて、さらに広く人間の「生」そのものに与える影響を解明するとともに、貨幣の存在の根本を人間の存在の基本条件に求めることに課題があるのである。

さらに、『貨幣の哲学』には貨幣そのものについて多岐にわたる学際的な内容豊富な記述が存在していることも事実である。これらの経済学の埒外にある問題について『貨幣の哲学』において示されている数々の論点と記

述は、経済学にとっても反省のための貴重な視点と問題として多くの示唆を与えてくれるものと考えられる。まさにジンメルの主張しているように、貨幣現象はすぐれて経済現象ではあるが、それは経済学によっては完全には論証し、解明し尽くされるものではないのである。こうした広い範囲にわたる視野と展望のもとで、「貨幣の二重の役割」によって、積極的な役割をみとめられた貨幣は、具体的にどのような性格と性質を与えられ、どのような作用を通じて、現代の高度に発達した貨幣経済に生きるわれわれになにを伝えるのであろうか。『貨幣の哲学』の第2章以下におけるジンメルの詳細な、しかし、多分に複雑な記述に期待するものはきわめて大きいものがあるのである。

注

- (1) 原著は1900年にドイツの Duncker & Humblot 社から Georg Simmel, Die Philosophie des Geldes として公刊され、7年後の1907年に同社から第2版が公刊されている。1989年に Suhrkamp 社から新版が公刊されている。この新版には、ジンメルの「自著広告文」と第1版との「改訂比較」および「編者記事」が付せられている。本稿ではこの新版を底本として使用している。
- (2) 日本語による『貨幣の哲学』の最初の全訳書は、白水社刊の『ジンメル著作集』の第2巻（第1章 元浜清海、第2章 向井守、第3章 居安正訳、1981年）と第3巻（居安正訳、1978年）である。その後、1999年に居安正訳『貨幣の哲学』（新訳版）が白水社から刊行されている。

なお1949年にすでに「分析偏」の翻訳書が、傍島省三訳『ジンメル・貨幣の哲学』として日本評論社から公刊されている。またさらに古く、1923年には翻訳書ではないが、恒藤恭著『ジンメルの経済哲学』と題して「分析偏」の解説書が改造社から公刊されている。

『貨幣の哲学』の英訳書は1978年に公刊され、第2版が1990年第3版が2000年に公刊されている。本文に変更はないが、版ごとに訳者による解説記事が新たに付け加えられている。仏訳書は1987年に公刊されている。

本稿においては、Suhrkamp 版を底本としている。引用については、ページ数を、原著、訳書の順に記載している。（例 126/99 原著/訳書）なお、原著からの引用文は必ずしも訳書と同じではない。

- (3) 最近、岩崎信彦、廳 茂編『「貨幣の哲学」という作品—ジンメルの価値哲学』

と題する解説書(世界思想社刊 2006年)が公刊されている。本書は『貨幣の哲学』の全般についての本格的な解説を試みた最初の記念すべき労作である。本書により難解な『貨幣の哲学』の内容理解にも、急速な進展が期待できるものと思われる。本書に関する記事としては、金融システム研究会『現代日本の金融システム』(第12集, 2006年 371-391ページ)がある。なお、同じく第10集, 11集にも『貨幣の哲学』についての関連記事がある。

- (4) David Frisby, Simmel and Since; Essays on Georg Simmel's Social Theory, 1992, p.81.
- (5) Gustav Schmoller, Georg Simmels Philosophie des Geldes, Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich, 25.Jahrg. 1901, Heft 17, S 1-18. シュモラーはこの書評でジンメルの見解の一部につて異議を唱えている。しかし、メンガーによるきわめて短い否定的書評とは全く異なり、全体として好意に満ちた公刊の意義を高く評価した内容となっている。下記にその一部分を引用しておく。

「ジンメルはなにか国民経済学的な新しい貨幣論を述べているのではない。彼はわれわれが貨幣について、歴史的および国民経済的に知っていることを、いわば材料として利用している。それはこの材料を社会学的、哲学的に活用し、それにより心理学的、社会科学、文化的な帰結を引き出すためである。しかし、そのために、社会学および文化史と同じように、貨幣論および国民経済学の通常の問題が欠落することになる。この研究においては、随所に、価値、分業、信用についての根本問題が顕出しており、貨幣の心理学的および哲学的な取り扱いによって新しい光りが与えられている。けれども、本書の本来の目的は、貨幣経済、とくに19世紀の近代経済が、人間と社会および両者の関連と調整に果たしたものを確認することにある。貨幣は、いわば近代の経済生活およびその遂行の中心点、鍵、中核としてみられている。貨幣は近代経済の核心において解明され、説明されるべきである。国民経済学的ではなく、心理学的な真理が、文化史的背景にもとづいて求められているのである」(S.1-2)

なお上記の記述に引き続いて、シュモラーは『貨幣の哲学』の各章についての長文の要約を記し、さらに本書の意義について述べたのち、最後に近く次のように記している。当時の方法論争の桎梏をあらわにしたと思えるような印象的な記述である。

「読者が未熟で教養が低ければ低いほど、いつもすぐに頭をふりながらあっさり本をわきにおしやり、この本は私には理解できない、これは私には細かく手が込みすぎているので、私はどうしようもないであろう。また国民経済学者のなかの俗物もまた同じな調子なのである。因習的な社会主義者は本書に貴族主義を嗅ぎ

つけるであろう。一流の教養人のいる本物の学問の世界は、それだけに逆にますます本書に感謝するであろう。どれも難しい章を二回あるいは三回と読む能力のあるものは、喜びと高まりゆく教示をうるであろう。」(S.16)

なお、このシュモラーの書評は、1994年公刊されたGeorg Simmel; Critical Assessmentsには収録されていない。書評はKintzélé, J./Schneider, P, (Hrsg.) Georg Simmels Philosophie des Geldes, 1993, S.195-201に再録されているが、上記に続く原文の最後の10行が省略されている。

- (6) ジンメルの『貨幣の哲学』の経済学的分析として、「貨幣の二重の役割」の概念を経済発展の原動力として位置づける試みは、Paschen von Flotow, Geld, Wirtschaft und Gesellschaft, 1955にみられる。その後、同様の趣旨のものがPaschen von Flotow und Johannes Schmidt, Die Doppelrolle des Geldes bei Simmel und ihre Bedeutung für Ökonomie und Soziologie, in Otthein Rammstedt(Hrsg.), Georg Simmels Philosophie des Geldes, 2003, S.58-87に提示されている。本稿においては、「二重の役割」そのものの原典に則した理解を目的としており、これらの文献の内容についての詳細な検討は今後の課題である。
- (7) 「貨幣の二重の役割」は、アリストテレス的な貨幣観において、「不自然」とされ、倫理的に否定された積極的役割を理論的にも実際的にも妥当なものとして承認するものであり、この点で近代的、現実的な貨幣観を主張するものである。しかし、他方において、ジンメルの主張する相対主義哲学との関係において、貨幣は果たしてこの原理に適合したものであるのかという疑問を払拭しきれないままである。ジンメルは『貨幣の哲学』の最後を貨幣の相対性哲学の世界観との適応関係を強調するつぎのような文章で終わっている。ここにいたるまでの「貨幣の相対性」についての論証と行論の内容の検討がこれからの課題の一つとして残ることになる。

「ここでいまや歴史的な世界の形象〔貨幣〕は、事物の事実的な関連を象徴することによって、世界と事物の状態とのあいだに特別な結び付きをつくりだす。社会の生活がより貨幣経済的となればなるほど、存在の相対主義的な性格は意識的な生活にますます効果的に、ますます明白に現れるようになる。というのは、貨幣は経済的な対象が特殊な形象に体現化された相対性であり、この相対性が対象の価値を示すからにはほかならないからである。そして絶対的主義的な世界観が、人間的な事物の实践的、経済的、感情的な構成に相応した相関関係において、一定の知的な発展段階を示すのと同じように、相対主義的な世界観もまたわれわれの知性の現実的な適応関係を表現するように思われる。すなわち、おそらくこの関係は社会的および主観的な「生」の対極物によってより適切に確認され

る。「生」は貨幣において、その形式と運動との真に有効な担い手と同時にそれらを反映する象徴とを発見したからである。」716/579-80

※ 本稿の執筆にあたり、多数の関係文献の利用について、関西大学、関西学院大学、大阪大学、各大学図書館から御高配をいただいた。心から御礼を申し上げる次第である。